

聖書：マタイ 13：1～23

説教題：百倍の実を結ぶ

日時：2019年7月7日（朝拝）

13章にはイエス様のたとえ話が多く記されています。今日はその中の一般に「種まきのたとえ」という名で呼ばれる有名なたとえ話を見て行きます。まずこの13章が前後関係の中でどんな位置づけにあるかを押さえておくことは、この箇所を理解する上で欠かせないことと思います。これまで見て来た11～12章ではイエス様に対する人々の色々な反応が記されました。主にそこに記されたのは人々の反対あるいは拒絶といった態度でした。12章最後の部分では、イエス様を信じる人々の群れがあったことが書き留められていました。なぜこのようにイエス様に対する反応は分かれるのでしょうか。どうして色々なのでしょうか。弟子たちとしては、イエス様は神の国をもたらし始めて下さった素晴らしい神の使者です。ところがみんながこの方を喜び、歓迎するわけではない。信じない人、反対する人、激しく敵対する人、様々です。どうしてこうも人々の応答は色々なのでしょうか。これに対して答えているのがこの13章です。その際、イエス様はたとえ話を用いて語って行かれます。

さて皆さんはたとえ話が好きでしょうか。おそらく多くの人は好きだと思います。たとえ話はたいてい日常生活に親しみのある事柄を材料にします。ですからイメージしやすいですし、リラックスしながら、楽しみつつ、その話を聞くことができます。しかしイエス様はなぜたとえ話を語られたのか。それは読んで行くと分かりますように、話を分かりやすくするためではありません。3～9節に、そのたとえが記されていますが、果たしてこれは分かりやすいでしょうか。私たちは18節以降のイエス様の説き明かしのことばを知っているため、簡単であるかのように思うかもしれませんが、たとえそのものは決してそうではないと思います。イエス様が話されたたとえはこんな内容です。「ある人が種まきに出かけ、その種の一つは道端に落ちた。それは鳥が来て、食べてしまった。別の種は土の薄い岩地に落ちた。その種はすぐに芽を出したが、日が上ると焼けて、枯れてしまった。別の種は茨の中に落ちた。すると茨がそれをふさいでしまった。最後のものは良い地に落ちた。その種は100倍、あるいは60倍、あるいは30倍の実を結んだ。耳のある者は聞きなさい。」果たしてこれで何が分かるでしょう。弟子たちもこれを聞いて、10節でイエス様に「なぜ、彼らにたとえでお話になったのですか」と問うています。もっとはっきり語った方が分かりやすいのではないのでしょうか、と。そ

んな彼らの問いに答えて、イエス様はたとえで人々に話す目的について語って行かれます。

まず 11 節：「あなたがたには天の御国の奥義を知ることが許されていますが、あの人々には許されていません。」 これは神の国の真理を理解することにおける神の主権あるいは神の恵みについてイエス様が言われた言葉です。イエス様の話を聞いて理解する人とそうでない人、悟る人々とそうでない人々がいます。どうしてそのような違いが生じるのか。イエス様はあなたがたには許されているが、そうでない人々には許されていないと言っています。この「許す」また「許さない」は神の主権を指しているでしょう。ある人たちはこの「神の主権」という聖書の教えを聞くと面白くないと思います。人間は自分が主権者でありたいからです。しかし聖書における神の主権は神を専横的な君主のイメージで考えるべきものではありません。これは言い換えれば、神の恵みがなければ私たちは神のことを悟ることはできないということです。生まれながらの人間には誰一人その力はない。もし私たちが神の国の奥義とまで言われている真理を知ることができるとすれば、それはただ神の恵みのおかげと言う外ないということです。後に 16 章 16 節でペテロはイエス様について立派な信仰告白をします。その時、イエス様はペテロに言われます。「バルヨナ・シモン、あなたは幸いです。このことをあなたに明らかにしたのは血肉ではなく、天におられるわたしの父です。」 ですから私たちは神の真理を知ろうとするなら、自分の知恵に頼るのではなく、まず神の恵みを請い求めなければなりません。そしてもし何かが分かったら、それはただ神の恵みによることとして、神に感謝をささげる者でなくてはならないのです。そしてイエス様は 12 節で言われました。「持っている人は与えられてもっと豊かになり、持っていない人は持っているものまで取り上げられるのです。」

こう述べた上でイエス様は 13 節でたとえで話す理由について語ります。なぜイエス様はたとえでお話しになるのか。それは「彼らが見てはいるが見ず、聞いてはいるが聞かず、悟ることもしないから」である、と。「見てはいるが見ず」とはどういうことでしょうか。それは見てはいるが、見ようとしないうえ、見ないということです。また耳で聞いたとしても、聞こうとする気がないから、現実的には聞いていないのと一緒。片方の耳からスーッと入っても、もう片方からスーッと抜けて行く。そうしてイエス様は 14～15 節でイザヤ書の預言を引用し、これが彼らの上に実現したと言っています。これは実際には 11～12 章で見て来た人たちのことを指して語られた言葉です。彼らはイエス

様の素晴らしい御業を見、そのことばを聞いても、それには目をつぶり、耳をふさいで受け入れませんでした。そして悪霊のかしらベルゼブルによってそうしていると中傷したり、もっと他のしるしを見せて我々を満足させよ！と要求しました。要するに聞くつもりがない。受け入れるつもりがない。彼らがそういう状態だからわたしはたとえで話す！とイエス様は言っているわけです。7章6節：「聖なるものを犬に与えてはいけません。また、真珠を豚の前に投げてはいけません。犬や豚はそれらを足で踏みつけ、向き直って、あなたがたをかみ裂くこととなります。」聞くつもりのない人たちにいくら語っても無意味です。そういう人にいつまでも福音を差し出し続けることによって、尊い福音の宝が軽く扱われるような状態にはするな！と言われていました。この人々は真理をはっきり語っても反抗するだけです。だからわたしはたとえで話す！とイエス様は仰るのです。これによって聞く耳を持たない人は益々ぼんやりします。何となく表面のことはさらっと分かったようなつもりになっても肝心なことは何一つ分からない。そして15節後半にあるように、その人々は立ち返ることがないようになり、イエス様による癒やしを受けることができないという悲惨なゴールへと、自らが刈り取った報いとして進んで行くことになるわけです。

たとえにはこのように聞く気がない人が益々分からなくなるという機能とともに、反対に聞く気のある人が益々それによって益を受けるという肯定的側面も持っています。12節に「持っている人は与えられてもっと豊かになり、持っていない人は持っているものまで取り上げられる」とあった通りです。その人はそのたとえを通して、より深く神の国を思い巡らし、その豊かな真理に養われることにもなります。その人たちの祝福が16～17節でこう語られます。「しかし、あなたがたの目は見ているから幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているから幸いです。まことに、あなたがたに言います。多くの預言者や義人たちが、あなたがたが見ているものを見たいと切に願ったのに、見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと切に願ったのに、聞けませんでした。」

ですからイエス様がたとえで話される目的をまとめるとこうなります。それは単に話を分かりやすくするためではない。あるいは逆にはっきり語らないことによって人々に分からなくさせるためでもない。たとえば真に聞こうとする人々と、そうでない人々とを分けるのです。聞く気があって心開かれている人は、たとえを通して益々豊かに持つ者とされる。一方、そうでない人は益々真理が分からない者とされる。ですからイエス様のたとえは聞き手にチャレンジするのです。ですからイエス様は9節で「耳のある者

は聞きなさい」という言葉をもって、たとえを結んでおられるのです。

さてでは聞く耳と聞く心を持つ者に対してイエス様が説き明かされた種まきのたとえのメッセージの部分を見て行きます。種を蒔く人とはイエス様のこと、そして蒔かれる種とは福音の言葉のことです。それが蒔かれる4つの土地は、それを受け止める私たちの心のことです。一つ目の道端の人とは、その心が固くて御言葉を受け付けません。そこにも種は蒔かれます。しかしその人は聞く気がないので、語られた御言葉はそこにあるだけです。そしてその内に悪い者すなわちサタンがやって来て、それを持ち去ってしまう。そのため、結果的にその御言葉はその人に何の影響も与えない。聞いても聞かなくても全く同じという人です。

二つ目の岩地の人は、御言葉を聞いてまずは喜んで受け入れます。この人は一つ目の人とは違って反応を示します。しかし岩地で土が薄いため、その御言葉が根を張ることはできない。そのため、日照りにたとえられるような困難が少しでも自分の生活に臨むと、つまづいて終わりとなってしまいます。つまり表面的な人のことです。最初は基督教のメッセージは素晴らしいと感動し、聞く耳を持っている人のようですが、基督教を信じれば良いことだけがあるかのように考えている。しかし聖書ははっきりと、信仰者であるがゆえの苦しみや迫害があると言っています。そういうメッセージを聞いたり、経験したりすると、あっさりこれを捨てる人、信仰をやめる人です。

三つめは茨の土地の人です。この人の問題は種が成長するのを妨げる色々な要素が周りにあることです。その一つはこの世の思い煩いです。この世で生活するための色々なことに心が多く捕らわれ、またそれによって引き裂かれてしまい、信仰のことを考える余裕も時間もない。また「富の誘惑」とあります。お金が常に関心の第一にあり、どうやってたくさん稼ごうか。それによってどんな生活をしようか。どんな美味しいものを食べ、どんな素敵な服を着て、何をして遊んで毎日過ごそうか。こういったことに心の多くの部分が捕らわれて、信仰が二の次、三の次となる。信仰のいのちが言わば窒息させられてしまう。そのため、実を結ぶことには至らない。

しかし四つ目は良い土地の人です。この人は御言葉を聞いて、その種をしっかりと受け止める人です。しっかりと心に抱き、自分の中心に置く人です。その人は実を結びます。ある人は100倍、ある人は60倍、ある人は30倍とされています。

ここになぜ同じイエス様のメッセージを聞きながら、それに接する人々の間に様々な違いがあるのかという問いに対しての答えがあります。それはそれぞれの心の土壌が違うからです。蒔かれている種は同じです。しかしそれを聞く人々の心はどうなのか。その心が道端のように固くては何にもならない。土が薄い岩地でもダメ。茨がたくさん生えている土地でもダメ。これらの人々の間にはいくらかの違いが見られますが、結局みな実を結びません。4つ目にたとえられる人々の間にも違いがあります。それらの人々はみな良い地と言われています。けれども受け止め方によって30倍の実を結ぶ人もいれば、60倍の人、100倍の人もいます。それぞれの心の状態によって実る人たちの間にも程度が変わって来るのです。ですからある人たちがイエス様のメッセージを聞いて、何の反応も示さなくても驚くべきことではないということになります。11~12章で見たように、拒絶する人が多く見られても、それはその人たちの心がそういう状態であるということです。そして大事な問いは人のことではなく、私はどうなのかということ。おそらくすでにクリスチャンである人は自分は1番目の人でないと思うでしょう。しかし自分は2番目の薄い岩地の人ようではないか。あるいは3番目の茨の土地のような人ではないか。この世のことに心が多く奪われ、そちらにばかり関心を注いでいる。信仰よりも他のことを優先して、聖書を読む時間も祈る時間も追いやってしまっているのではないか。敏感な人ほど、そう思うかもしれません。しかし自分はそうなんだ！と思って、そこにとどまっていて良いわけではありません。それでは実を結ぶことができません。大切なことは自らを振り返って、改めて4つ目の良い土地の人であることを祈り願ひ、自分の生活をそのように変えて行くことではないでしょうか。一つ目の人ではなく、二つ目の人でもなく、三つ目の人でもなく、四つ目の人であり続けられるように！と。

蒔かれる種は小さく、それ自体は人に威圧感を与えるようなものではありません。同じように福音の言葉も人々にとって脅威的なものではありませんし、人を圧倒するようなものでもありません。種をつぶし、捨て去ることができるように、福音の言葉もそのように簡単に退け、無にすることができます。しかしその御言葉の種は驚くべき力、とてつもない力を秘めています。改めて自らの心を点検して、この御言葉の種を本当に受け入れる者でありたいと思います。この心がしっかりその種を受け止める良い地であるように。そのように導いてくださる神の恵みを祈り求めつつ。そうする者には豊かな祝福が約束されています。持っている人は与えられて、さらに益々持つ者とされます。そ

の心の状態により、30倍、60倍、100倍の実を結ぶ者とされます。この祝福に生きる者とされたいのです。